



初めてできた大好きな彼女の足の匂いをバレないように嗅ぎまくる背徳の同棲生活

第一章：恋と欲望のあいだで

大学 2 年生、岸本遥人（20）は、自分が人より少しだけ変わっていることを自覚していた。

小さい頃から想像力が豊かで、ひとり遊びが得意だった。

公園の石を「宝石」や「怪獣の卵」と信じて大事に持ち帰ったり、空想の物語を考えて夢中になったり。

そんな遥人には、物心ついた頃から自覚しているある癖があった――。

それは、誰にも言えない癖。

自分でも「変だ」と思うくらい、ある一点に異常なほど惹かれてしまう――それは、女性の足の匂いへの憧れだった。

すれ違った綺麗な女性が汚れてくたびれた靴を履いていたり、土足禁止の病院の下駄箱にインソールの汚れた女性物の靴が入っているのを見てしまうと、持ち前の想像力が働き、

ついその靴の中の匂いを想像して性的興奮を覚えてしまう。

いわゆる足の匂いフェチだった。

小学校の頃から、その衝動を抑えきれずに度々放課後に下駄箱へ向かい、周囲を警戒しながらクラスの気になる女の子の上履きの匂いをこっそり嗅いだりしていた。

もちろん、誰かにこの癖を口にしたことは一度もない。

そんなことを言えば引かれるに決まっているし、変態扱いされて終わりだ。

だから遥人は、大学生活が始まってもずっと「普通」を装って生きていた。

だが、ある女性との出会いが、そんな彼の平穩をゆっくりと侵食していくことになる。

* *

出会いは、大学1年の頃。

所属している演劇サークルの新歓だった。

先輩たちの軽い自己紹介がひととおり終わり、新入生同士で自己紹介タイムに移ったその時だった。

「はじめまして、天野柚葉です。演技経験はないんですけど、楽しそうだなと思って……よろしくお願いします」

その場がふっと明るくなるような声。
透き通るような肌に、白のワンピース。手入れのされた艶のある茶色の長い髪に、ぱっちりとした瞳。

そして——足元はヒールの低い赤いぺたんこパンプスを素足で履いていた。

遙人はその瞬間、体に電流が走るような運命の出会いを感じた。

この子だ。

まるで恋愛映画のヒロインが舞台袖から登場したかのような錯覚。

一目惚れだった。

そこからの遥人の行動は必死だった。

LINE 交換、稽古の帰り道に自然と話しかける、小さなプレゼント……どれも不器用だったが、何とか人生初めての彼女を作ろうと頑張り、日々柚葉との距離を縮めていった。

* *

そして出会ってから 1 年後。

柚葉に告白し、努力の甲斐があつてかついに人生初めての彼女が出来た。

その夜、遙人は一睡もできなかった。
純粹な嬉しさと、そしてもう一つ——

柚葉の足をもっと身近で見れるという期待が遙人の脳を埋め尽くしていた。

* *

—付き合い始めて2ヶ月後—

人生で初めての彼女。

それが、こんなにも可愛くて優しくて、天使みたいな存在だなんて——遙人は、毎日のように思っていた。

どうして自分なんかと付き合ってくれているのか、不思議で仕方がなかった。

サークル活動も、週末のデートも、日々のLINEのやり取りさえも。

何もかもが新鮮で、楽しくて、まるで夢を見ているようだった。

「おはよう、今日暑くなるみたいだよ～」

「今日の稽古、赤い T シャツ着てくから分かりやすいかも！」

そんな些細なメッセージですら、遥人にとっては心を跳ねさせるものだった。

柚葉はいつも自然体で、周囲の空気をやわらかく包み込むような優しさがあった。

稽古中、疲れた先輩にさりげなく飲み物を渡したり、後輩に台詞のヒントを出したり。そんな姿を見るたびに、遥人の中の「好き」はどんどん膨らんでいった。

だが同時に、もう一つの感情もまた、密かに、しかし確実に膨らんでいく。

柚葉の足の匂いを、嗅いでみたい。

彼女が稽古場で靴を脱ぎ、素足でストレッチを始めた時——

脱がれたパンプスが、床にぽつんと置かれているのを見つけた瞬間。

遥人の視線は、無意識にその中敷きへと引き寄せられた。

長時間履かれたことで、柚葉の足に馴染んだ形。

靴の表面はうっすらと汚れ、所々小さな履き皺も見える。

遠目に見ても日々彼女の足に履きこまれている靴である事がうかがえる。

(……あの靴、今どんな匂いがするんだろう……)

頭に浮かぶその想像を、遥人は全力で振り払った。

そんなことを考えている自分が、嫌だった。

けれど、想像してしまったものはもう戻らない。

脳裏に焼きついた“パンプスの中の世界”は、甘美すぎて、逆に恐ろしかった。

デートの時も、ふと気になってしまう。

ショッピングモールを歩き回った日。

炎天下の遊園地でたくさん歩いた日。

柚葉の足元には、お気に入りなのか、大体いつも同じ赤いぺたんこパンプスが履かれている。

しかも、素足のまま。

座って休憩している時、パンプスの縁から覗く白い甲や、指先の形がうっすらと浮かぶつま先を見るたびに――

（この中、今すごく蒸れてるんじゃない？）

自分の中の想像力が、本能を煽ってくる。

だけど、口には出せない。絶対に。

「今日は私の買い物に付き合わせちゃってごめんね～」

そう言って、柚葉はベンチに座りながらパンプスを履いた足をパタパタと浮かせてみせる。

その動きに合わせて、パンプスの中からわずかに見える汗ばんだ素肌。

(……ああ、嗅ぎたい。近くで、直接)

喉元までせり上がる衝動を、遙人は飲み込んだ。

こんなに素敵な彼女に、もしこんな願望を知られたら——軽蔑されて、嫌われて、終わってしまうかもしれない。

ようやく手に入れた幸せを、自分の“性癖”で壊したくない。

そう自分に言い聞かせながらも、遥人の中で
柚葉の足への執着心は、確実に膨らみ続けていた。

第二章：3ヶ月の節目に

「ねえ遙人くん、もうすぐ、付き合って3ヶ月だよね？」

放課後の稽古帰り。

夕暮れのオレンジ色が差し込むカフェの窓際で、柚葉がふわりと微笑んだ。

「……うん、そうだね。もう3ヶ月か……あつという間だったな」

遙人は、思わずその横顔に見とれていた。

綺麗な髪に差し込む西陽、手にしたアイスコーヒーのグラスがわずかに汗をかいている。

そして、その細い足首を覗かせ、かかとだけ軽く脱がれた赤いパンプスの中敷きにも、微かに濃淡が。

(今日も……素足、なんだな……)

無意識に視線が吸い寄せられてしまう自分に気づき、慌てて顔を上げた。

「私ね……ちょっと前から思ってたことがあって」

柚葉が、恥ずかしそうに指先をもじもじと絡める。

その仕草があまりに愛らしく、遥人の胸はまた一段と高鳴った。

「実はね……彼氏ができたら、一緒に行ってみたって、ずっと憧れてた場所があるんだけど…」

「そうなんだ、どこ？」

「遥人くんと……ティズリーランド行ってみたいなって……思ってた……」

声は小さかったけれど、彼女の目はまっすぐだった。

その言葉を聞いた瞬間、遥人の中に熱が灯った。

「ティズリーか。良いね。行こう。行こうよ、絶対行こう」

即答だった。

遥人にとっては初めての“彼女との旅行”だ。そして柚葉にとっても、それは同じだった。

そうして話は一気に盛り上がり、
付き合って3ヶ月記念に、1泊2日でのティズ
リーランド旅行が決まった。

嬉しそうな柚葉の笑顔は、純粋な少女そのものだった。

その横で遥人は、言葉には出さなかったものの、純粋な旅行に対する期待とは別のざわつきを感じていた。

1泊の旅行。つまり、同じ部屋で夜を過ごす。

その現実には胸が高鳴るのは当然だったが、
もうひとつ、抑えきれない妄想が、遥人の中でじわりと顔を出し始めていた。

——朝から晩まで歩き回った柚葉の足。
——ホテルで靴を脱いだ、その瞬間の“匂い”。

(……やばい、本当にヤバい。こんな機会、
今までなかった……)

だが同時に、遙人はその妄想を叱るように、
自分の内側で強く抑え込む。

これはただの“恋人としての記念旅行”なんだ。
それ以上を求めるなんて、卑しい。最低だ。

——それでも。
想像は、止められなかった。

憧れの甘酸っぱい青春。清楚で可愛い彼女の足の匂い。

その狭間で揺れる遥人の心は、3ヶ月記念の旅行を前に、確実にある一点に近づいていた。

第三章：魔法のキスと、期待の夜へ

待ちに待った旅行当日の朝、駅の改札前に現れた柚葉を見た瞬間、遙人の鼓動は一気に高鳴った。

白地に淡いピンクの花があしらわれたワンピース。

ふわりと風に揺れる裾から覗く脚は、色白でスラッと長く、いつも通りの素足。そして足元には——いつもの赤いぺたんこパンプス。

「おはよう、遙人くん。待った？」



そう言って小さく微笑むその姿は、遥人の目にはまるで映画の中のヒロインのように映った。

「……ううん、大丈夫。その服すごく似合ってるね」

思わず本音が漏れると、柚葉は少し照れたように頬を染めた。

＊ ＊

ティズリーランドは、平日とはいえ人が多かった。

でも、それすらも楽しかった。

ティズリーキャラクターの形をしたチュロス
を半分こしながら笑い合い、アトラクション
の待ち時間で他愛もない話をし、肩を並べて
歩くだけで幸せだった。

ふとした瞬間に視線が足元に落ちる。
赤いパンプスがアスファルトをこつこつと打
つ音。

その中で一日中閉じ込められている柚葉の足
の匂いのことを、遥人は何度も想像してしま
いそうになるのを、理性でなんとか押し戻し
ていた。

そして夜。

ランドの片隅、イルミネーションで淡く彩られたベンチに二人で並んで座る。

照明に照らされた柚葉の横顔が、幻想的な光に包まれていた。

パレードの音が遠くで聞こえ、すれ違うカップルたちもどこか幸せそうで、まるでこの世界に“不幸”なんて存在しないかのようだった。

「楽しかったね……」

「うん……また来たいな……」

「また、絶対来ようね」

「……うん……」

自然と、顔が近づく。

会話は途切れ、代わりに互いの息づかいだけが交わる。

そして、そっと唇が重なった。

長くはない、けれど確かなキスだった。

彼女の唇は、少し冷えていて、でも柔らかくて。遥人の心の中に、甘い火が灯る。

キスをした瞬間、遥人の中で何かが“切り替わった”。

頭では抑えようとしても、男としての本能が理性の裏側から顔を出す。

柚葉の手の感触。ワンピースの下にある細い脚。

そして、朝から今まで履き続けていたパンプスの中の——匂い。

(……このあと、ホテルで……)

期待は、止められなかった。

恋人としての距離を越えた先を、遥人の体はすでに求め始めていた。

* *

「じゃあ、そろそろ行こっか。ホテル、チェックイン時間もうすぐだし」

柚葉が言ったその声に、遥人は我に返る。
頷きながらも、心臓の高鳴りは収まらなかった。

ロマンチックなキスの余韻と、欲望の火を抱えたまま、
二人は魔法の国をあとにし、夜の街へと歩き出した。

* *

ホテルのフロントでチェックインを済ませ、
エレベーターに乗り込むと、
遙人の心拍数は明らかに上がっていた。

——ついに、同じ部屋で夜を過ごす。

しかも今日は、朝から晩まで歩き通しのティ
ズリーランドデート。

パンプスの中で一日中密閉されていた柚葉の
素足が、いよいよ——

想像するだけで、遙人の股間はじわりと熱を
持ちはじめていた。

部屋の扉を開けた瞬間、柚葉はぱっと笑顔になって声を上げた。

「うわぁ……広い！ダブルベッドって、こんなに大きいんだ……！」

楽しそうに部屋の中へ駆け込みながら、無邪気にはしゃぐ姿がまぶしい。

白の花柄ワンピースがひらりと揺れ、細くしなやかな脚が床を踏みしめる。

遥人はその背中を見ながら、胸が締めつけられるような感情に包まれていた。

(……可愛い)

それ以外の言葉が、浮かばなかった。

「今日はいっぱい歩いたから、もう足パンパンだよ～」

柚葉はそう言いながら、ベッドのふちに腰を下ろすと、パンプスのかかとを片方ずつゆっくり外していく。

ぬるり、と音を立てて脱がれる赤いパンプス。中から現れたのは、白くて柔らかそうな素足。

つま先をくいと曲げ、甲を伸ばして軽くストレッチするように動かすその動きすら、遥

人の目にはスローモーションのように映った。

遠目で見えたパンプスの内側には、中敷きの表面に、明らかに汗の滲んだような濃淡の跡。

パンプスを無造作にベッドの脇へ脱ぎ置き、
柚葉はそのまま大の字になってベッドに寝転がった。

「ふう～……疲れた～……」

小さな吐息とともに脱力する彼女。
ワンピースの裾がわずかにめくれ、太ももが露わになる。

だが遥人の意識は、それどころではなかった。

柚葉のすぐそばに、無防備に転がる赤いパンプス。

そして、そのすぐ隣で大胆にさらされているつま先の赤らんだ素足。

それらが、まるで彼を誘うようにそこに“在る”。

(……今、この部屋には俺と柚葉しかいない)

(……このパンプスの中は、きっと……)

遥人は息を詰め、視線を逸らすことができなかった。

理性が警告を鳴らす。
だが、本能はすでに牙を剥き始めていた。

彼女の知らないところで、遥人の身体は明らかに変化していた。

興奮が、血流となって下半身へと集まり、ジンと熱を帯びていく。

「……ねえ、遥人くん」

突然、ベッドに寝転んだまま柚葉がこちらを見て微笑んだ。

その声にびくっとして、遥人は目をそらすように顔を上げた。

「うん？ な、なに？」

「一緒に、ゴロゴロしょ？」

何も知らず、無垢なまま差し出されたその言葉に、
遥人の理性の糸が、今にもぷつんと切れそうになっていた。

第四章：眠れるヒロインと、揺れる理性

「……うん。じゃあちょっと、先にシャワーだけ浴びてくるね」

遥人は、柚葉にそう言うとバスルームへと向かった。

——本当は、すぐにでも隣に寝転がって、彼女の温もりを感じたかった。

でも、ふと脳裏をよぎったのは、自分の“匂い”だった。

(……朝から汗かいたし、園内も暑かったし……)

せっかくの初旅行。
彼氏として、最低限の清潔感を保ちたい。

何より——柚葉に「汗くさい」と思われるのが、怖かった。

バスルームに入り、熱めのシャワーを浴びる。

髪を濡らし、ボディソープで丁寧に体を洗いながら、遥人の中の興奮はむしろ強くなっていた。

——今、あのベッドの上には、柚葉がいる。

——花柄のワンピースのまま、素足で。

パンプスは脱ぎっぱなしで、たぶん、足は汗でしっとりしてるはずだ。

——あの中敷きの沈み、うっすら濡れたような跡……。

（あの中、今、確実に柚葉の匂いで充満してる……）

考えれば考えるほど、下腹部に熱が集まっていく。

冷水を浴びても収まらないほどの衝動が、遥人の身体を突き上げていた。

無理やり別の事を考え、何とか気持ちを落ち着かせる。

シャワーを終えてバスタオルで髪を拭きながら、部屋の扉をそっと開ける。

「柚葉、待たせ——」

言いかけて、遙人は息を飲んだ。

ベッドの上。

柚葉は、さっきと同じ体勢のまま、大の字になって寝息を立てていた。

小さな胸が規則的に上下し、頬にはうっすらと疲れの色。

ふわりと広がったワンピースの裾の奥、白く滑らかな太ももが片脚だけ大胆にあらわになっている。

そして足元には、無造作に脱がれた**赤いパン**プス。

今しがたまで彼女の汗を吸い、蒸されたばかりの**素足**が、
そのすぐ隣で、まるで誘うように無防備にさらされていた。

(……寝てる)

遥人の喉が、鳴った。

罪悪感よりも、先に興奮が突き上げてくる。
自分の手が、無意識にバスタオルを握りしめていた。

(やばい……本当に、やばい……)

この距離、この状況。
彼女は眠っていて、誰にも、何も、知られない。

遥人の中で、これまで抑えてきた**欲望のダム**
の壁が、音を立ててきしみ始めていた。

＊ ＊

付き合って 3 ヶ月。
柚葉の足元を意識しなかった日は、一日たりとも無かった。

サークルの稽古中、無防備に脱がれたパンプスを見つけては、視線を逸らすふりをして何度も盗み見た。

デートの時、目の前で軽くパタパタと靴を脱ぎかける仕草を見るたびに、鼓動が跳ねた。そのたびに、遥人は齒を食いしばって自分を抑えてきた。

(……でも、今だけは)

部屋の中は静まり返っている。

柚葉は、大の字になったまま気持ちよさそうに寝息を立てていた。

目を閉じて、夢の中にいる。
その足元には、彼女の赤いパンプス。

朝から晩まで素足で履かれ、いままさに蒸れきったまま、ぽつんとそこに置かれている。

(バレずに……今なら、嗅げる)

心臓が暴れ出す。
頭では分かっていた。これは最低な行為だ。

でも、朝から昂り続けた気持ちと、この状況。理性だけでは押し留められなかった。

20歳の健全な男の欲望は、もはや限界だった。

遥人はゆっくりとベッドの端に近づく。

一步、また一步。柚葉の寝息を聞き漏らさぬよう、息を殺して忍び寄る。

ベッド下に置かれたパンプスの傍までたどり着くと、膝をついてしゃがみ込む。

そして、そっと、左足のパンプスに手を伸ばした。

(……初めて、こんな近くで見る……)

指先がパンプスに触れた瞬間、遥人の手が小さく震えた。

女の子らしい小さいサイズのパンプスは、しっかりと履きこまれたのが分かる程度の表面の汚れとくたびれ感、踵の部分には皺が入り、靴底はすり減って滑り止めのパターンも摩耗していた。

明らかに**柚葉**の足で“履き込まれた”時間が、この靴には刻まれている。

(これが……柚葉の足を、ずっと包んでた……)

震える指でゆっくりと靴を傾け、中敷を覗き込む。

——そこには、想像以上の光景があった。

おそらく白か明るいクリーム色だったであろうはずの中敷きは、全体的にうっすらと黒ずみ、つま先の方には**指の跡に沿ったくっきりとした凹みと色の濃い汚れ**が残っていた。

かかと部分に印字されていたであろうブランドロゴは完全に消え、何度も柚葉の足で踏まれていた事が見て分かる。

(ヤバイ……)

遥人の下腹部がビクンと脈打った。
見ただけなのに、もう股間がカチカチに硬くなっていた。

（想像の何倍も……エロい……）

これが、自分の大好きな彼女のパンプス。

清楚で、柔らかくて、まるで映画のヒロインのような可愛い柚葉の汗と、湿気と、生活が染み込んだ“実物”。

嗅ぎたい。

今すぐ、鼻を近づけて、その匂いを肺いっぱい
に吸い込みたい。

どんな匂いが詰まってるのか、確かめたい。

(……でも、まだ……)

遙人は、震える手でパンプスを持ったまま、
鼻先までそれを運びかけて――

ふと、ベッドの上の柚葉を見上げた。

寝息は、まだ静か。

だが、この先の行為が、どれだけ一線を越える
ことかも分かっている。

遙人の理性は、最終警告を鳴らしていた。

(……この先へ行くなら、もう戻れない)

それでも、彼の指はパンプスを離そうとはしなかった。

第五章：ダムが決壊する時

遙人は、震える手で左足のパンプスを持ち上げた。

呼吸が浅くなる。心臓は爆音のように鳴り、耳の奥で脈打つ血流が響いている。

——この中に柚葉の足のすべてが詰まっている。

彼女が一日中履いていた靴。
足汗と熱気を閉じ込めたまま、いま目の前にある現実。

これまで何度も想像してきたその世界が、いま、自分の手の中にある。

「……もう我慢できない……」

遥人は、パンプスの開口部にゆっくりと鼻を近づけ、吸い込まれるように中敷に鼻先を沈めた。

……その瞬間。

(っ……！)

意識が飛びそうになった。

むわっ、とした湿気を含んだ温かい空気が鼻腔を満たす。

パンプスの革の香りに混じって、明らかに汗で蒸れた足の匂いが鼻を突いた。

生々しく、濃密で、誤魔化しのきかない“足の匂い”。

（これが……柚葉の……）

鼻腔の奥で感じ取ったのは、酸味と発酵臭が混じった、**酢昆布**のような酸っぱさの奥に、**蒸したそら豆**を思わせる重く発酵したような香り。

革の匂いと汗が混ざり合って生まれたその香

りは、遥人にとってのまさに**理想**の足の匂い
そのものだった。

(やばい……やばい……これ、やばいって
……)

遥人は思わず鼻をパンプスの中敷に押し当て
たまま、ゆっくりと深く息を吸い込んだ。

鼻先に触れる中敷は、脱がれたばかりでほん
のりと湿っている。

つま先側には、沈み込んだ指跡の通りに匂い
が溜まり、より強く香る。

彼女の足そのものを嗅いでいるような錯覚。

普段の柚葉の笑顔や、優しい喋り方、白いワンピース……

そうした“清楚”のイメージとのギャップが、遥人の理性を根こそぎ持っていく。

(……俺、今、完全に……柚葉の靴の匂いを嗅げてる……)

そう思った瞬間、遥人は自分がどれだけこの瞬間を渴望していたかを知った。

抑えていた衝動、想像していた妄想。
すべてが、いまこのパンプスの匂いの中で、
一気に解放されていく。

——甘さと酸っぱさ、皮脂と革、湿気と時間。

その全てが混ざり合ったこの香りは、遥人にとって**最高の媚薬**だった。

遥人はパンプスに顔を埋めたまま、そっと目を閉じた。

自分の意識が、どこか遠くに溶けていくのを感じる。

左足のパンプスに顔を埋め、息を吸うたびに遥人の理性は削られていった。

この中には、確かに“彼女”がいた。

あの無防備で可愛い柚葉の、誰にも見せたことのない“裏側”が、嗅覚を通して遥人の中に染み込んでくる。

(……でも、まだ……)

もっと、深く知りたい。

遥人はふらつくような手つきで、ベッド下に残された**右足のパンプス**に手を伸ばした。

指が触れた瞬間、左よりも明らかに履き口がやわらかく沈むのが分かった。

(……やっぱり、柚葉、右利きだからか……)

踏みしめる力も、自然と右足のほうが強くなるからなのか、明らかに靴底のすり減った摩耗具合も、左足よりもはっきりとしていた。

その事実が、なぜか遥人の背筋をゾクゾクと震わせた。

恐る恐る中敷を覗き込む。
その瞬間、遥人は思わず息を飲んだ。

左よりも、気持ち**濃い**目に**黒ずんだ**指跡。
つま先から指の跡に沿って、まるで焦げ跡のように濃く、深い色に変色していた。

ロゴは完全に踏み消され、中敷き全体の汚れも心なしか濃く感じた。

(……すごい……)

遥人はそっと顔を近づけ、ゆっくりと鼻を中敷に押し当てた。

その瞬間、鼻腔を突き刺すような**強烈な蒸れ臭**が一気に押し寄せる。

左足パンプスの 1、2 割増し位の濃い足の匂い。

酸味、発酵臭、皮脂、汗……すべてが濃縮されていて、逃げ場がない。

(……っ、くる……！)

遥人の下腹部がビクンと跳ねる。
すでに限界に近い。

だが、それ以上に脳を焼くような快感が、鼻から奥へ、直接注ぎ込まれていく。

(……柚葉、右足の方が、くさいんだ……)

そう思った瞬間、遥人は本当に“柚葉という存在”の深部に触れた気がした。

彼女の癖、身体の使い方、生活のリズム——
その一端を、匂いから知れたことが、異常な
ほどの興奮に繋がった。

もう、限界だった。
ただ、出すわけにはいかない。

彼女はすぐそこに寝ていて、この状況は一度きりの奇跡だ。

(……まだ終わりじゃない)

遥人は震える手でパンプスを元の位置にそっと戻し、今度は、ベッドの上に横たわる彼女の素足へと、静かに視線を移した。

つま先はわずかに力が抜け、指がリラックスして開いている。

汗ばんだ甲の表面には、うっすらと光が反射し、肌は透けるように白い。

だが、その柔らかさの奥に、さっきまでパンプスに詰め込まれていた匂いが確かに息づいている。

——本体。

遥人の脳裏に、そんな言葉が浮かんだ。

パンプスはあくまで容器に過ぎない。
この足こそが、遥人を狂わせた“源”だ。

(……この素足を、嗅げたら——)

その妄想が、遥人の中で明確な“目標”へと変わっていく。

* *

いつ起きるか分からない。もう時間がない——。

理性も限界。
今、この瞬間しかない。

遥人はそう悟っていた。

柚葉の寝息は安定している。
掛け布団の上に投げ出された右足は、ベッドの端に近く、彼にとって最も“近い場所”にあった。

つま先が自然とゆるく開かれ、親指と人差し指の間にうっすらと影ができています。

足の甲には汗が乾ききらない柔らかな湿り気が残り、肌がわずかにテカって見えた。

遙人は、腰を落とすようにしてその足先に近づいた。

慎重に、できるだけ音を立てず、息すら控えめに。

(……起きるなよ……頼むから……)

最後の理性が、恐る恐る囁く。
けれど、その声も、欲望に飲み込まれつつあった。

息を止め、鼻先が柚葉の右足のつま先に近づいていく。

親指と人差し指の間、その密閉された指の谷間に、遥人は吸い込まれるように顔を寄せていった……。

【この先の展開】

●ついに夢にまで見た柚葉のパンプス脱ぎたて素足の匂いを直接嗅ぎ、理性が崩壊する。

●ずっと抑えていた欲望のタガが外れ、もう柚葉の足の匂いを知る前の生活には戻れなくなる遥人。

●なんとかしてもっと柚葉のそばに居たい遥人の提案でついに始まった同棲生活。大学生カップルらしい甘い同棲生活を送りながらも手の届く距離には毎日柚葉の脱ぎたてパンプスやストッキング……。夢のような生活に欲望が爆発。

●柚葉が友達との飲み会で帰りが遅くなる日。柚葉が居ない間に下駄箱を漁りやりたい放題していたら…etc…。

後半、欲望のタガが外れた遥人はこのままバレることなく欲望の限りを尽くすことができるのか…？怒涛の足、匂いフェチ描写と背徳感満載の続きは製品版で！